
僕と、彼たちと、彼女たち

安藤司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と、彼たちと、彼女たち

【Nコード】

N6017K

【作者名】

安藤司

【あらすじ】

新参者の安藤司あんどうつかさです。

未熟者ですが、広い心で受け止めていただけると嬉しいです。また、良かったら感想もぜひお聞かせください。

兄弟姉妹のように育った幼なじみの成長を描いていけたらと思っています。

幸せの朝

窓から差し込む眩しさに、無理矢理起こされるのはいつものこと。これだから、東向きの部屋は嫌なんだ。

いつも通り、体にかかっている布団を引っ張る。これはもう習慣。

だから、いつも遅刻ギリギリなんだよな。ま、遅刻しないのも習慣のうちか。

自分の良いように解釈をして、夢と現実の間で、布団を引っ張り上げようとした。

そこで自分の左腕にのしかかる重みに気づく。そして、ゆっくり顔を左腕に向けるとともに、うつすらと目を開ける。

「……ふ」

思わず笑みが漏れる。少し現実に戻される。

さらに、夢ではないことを確認するために、少し顔を近づけてみる。規則的な寝息。その寝息は半開きの口から洩れていて、よだれの跡が口元に残ってる。悟の腕すら濡れている。

無防備を通り過ぎているその姿はとても綺麗とも可愛いとも言えない。が、それなのに、くすぐったくなるような感情はなんなんだろう。

彼女が起きるまでももう少し寝ようか。

悟は布団の下の温かい体に両腕をまわした。東向きの家も悪くない。

出会い

バブルの最中、都心を中心に開発が進んだ。

が、それに飽き足らず、ベッドタウンと呼ばれる住宅街が一気にでき上がる時代。

1日、2日で様相は変わってしまうほど開発が急がれ、そして、空き部屋がないほど人がさまざまなところから集まり、山だったり、林だったり、荒地地だった土地は簡単に街になる。

そんな時代にできた1つの住宅街で、1組の兄弟と、2組の姉妹が出会う。

5歳くらいの女の子が2人、階段の前で立ち尽くしてる。

階段が高いわけではない。

7段の低い階段を上げれば、家に入れる。母親がまた甘いお菓子を用意してくれているはず。それを食べたくて、家のまわりを一周して戻ってきた。

だが、今、2人はどちらが前に立つでもなく、ただ、手をしっかりと掴んで、おなじ方向を不安げに見つめる。

その視線の先には階段に沿って身をくねらせる細い蛇。

彼女たちには初めて身近に見るもので、広い階段の前で立ち尽くしてしまっている。

ただ黙って見つめる。蛇はゆっくり身をよじらせ階段を上っていく。これでは家に到底帰れない。母親に助けを求めることにできない。広い階段の左端にいる蛇を避けて左側から上ることも、初めて蛇を見る彼女たちには恐怖でしかない。今はゆっくり動いている蛇も、こちらに気づいて、もしかしたら飛ぶように進んで噛むかもしれない、たとえ、家までたどり着いても一緒に入ってしまうかもしれない……。

黙って見つめるだけ見つめて、どれくらい時間が経っただろうか。

蛇が視線で焼け焦げて穴が空いてしまつかもしれないというほどの時間が経ったころ、人が歩いてくる気配を感じて、やっと彼女たちの視線の位置が変わる。

その先には高校生くらいの少年が雑誌を読みながら近づいてくる。1人の女の子の顔がぱあつと輝く。いつもあそんでくれるおねえちゃんのおにいちゃんだ！

つないでいた手をぱつと離し、精一杯走る。そのあとを急に手を離されたことに、そして、蛇の前に1人置いていかれてしまったことに驚いたもう1人の女の子も続く。

「おにいちゃん！」

そう呼ばれた少年はそこでやっと雑誌から目を外して、とても、とても真剣そうな眼をした女の子に目を向ける。彼が住んでいる部屋の階下に住む女の子ということは知っている。が、それ以外は何も知らない。「あそんで」とか言われても困る。

少年は身をかがめることも、やさしく声をかけることもなく、女の子を見つめ返す。あとから走ってきた女の子は泣きそうな顔をしている。

「へび！」

声をかけてきた女の子が一言、大きな声でそう言う。

「へびが、いるの！」

今度は指をさして言う。

指をさされた方向に行くと、あと2段で階段を登りきる蛇が目に入った。うわ、蛇なんて初めて見た……。

少年が一瞬たじろぐと、今度は後ろから、かなり下からだか、熱い視線を感じる。

仕方ない、そう少年は息を吐く。どっちにしろ、これ、どうにかしないと僕も帰れない。

読みかけの雑誌を広げて、蛇の背後に近づく。そして、首の後ろあたりを雑誌に挟む。そのまま持ち上げると全体の3分の2がぶらんと、だが、少し動きながら、雑誌からはみ出す。雑誌越しに普段感

じることのない感覚がする。鳥肌が立つ。

そのまま振り返ると、2人の女の子は今度は抱き合うように、こちらを不安げに見ている。

ともかくどうにかしないと、と頭を巡らせる。

この住宅街はあえて自然を残して作られている。そのせいか、たぬきもたまに出るし、虫だつて多い。

蛇は初めて見たけれど。殺すといったつて、それは僕もできない。

もう、もとに戻すしか……。

そう考えて、早歩きで公園に向かう。公園といつても、正しくは公園の裏で、小さな雑木林みたいになっている。きつとこの蛇もここから出てきたんだ。

少し高くなっているところにそつと蛇を下す。すると蛇は今までゆっくり動いていたのが嘘のように林の奥にガサガサと音を立てながら消えていった。

もう戻つてくるなよ、そう心の奥から思う。できることであれば、もう見たくない。もう勘弁。

振り返ると2メートルくらい先に、また2人の女の子が抱き合うように立っている。ただ、先ほどと違うのは尊敬を感じる視線だということ。

少年はその視線が気まずくて、避けるように彼女たちの前を通ると蛇をつかんだ雑誌をゴミ箱に投げ捨てる。そのあとを1メートルくらい近くを2人がついてくる。言いたいことがあるのに、何から言つていいのかわからない。そんな雰囲気を感じて、

さらに気まずくて、早足になる。その後ろを小走りについてくる2人。

階段を1段飛ばしで上る。2人はついていけず、広い階段を2歩かけて、一生懸命上る。

結局何も言えずに、少年の姿は2人の前から見えなくなってしまった。

2人は蛇がいなくなった階段を上つて、やっと家に入る。

れて生まれて半年のわが子の目線もこちらに向く。

「食べないよ！」

「そうだよ、食べないよ！」

「食べない、食べない」

「うん！」

必死に訴える子どもたちが可愛い。心強いお姉ちゃんたちだ。自然と目が細くなる。

そうしていると、ぐらっとベビーカーが揺らいた。はっとなって、左側に重みがかかったベビーカーを支える。見れば何も言葉を発していなかった男の子がベビーカーに乗ろうとしている。今まで自分が使っていたベビーカーのせいか、やきもちなのか、ベビーカーの中の弟をつぶす勢いだ。

「だめだよ、たっちゃん！」

6歳になつた結がベビーカーから、4歳の祐を抱え上げる。その様子も不安定でこわい。

「結、危ないから」

横から母親が出てきて、祐を下させる。6歳にしてしっかり者の結は「危ない」と言われたことに少し不満げに口をすぼめたが、兄弟の母親に「結ちゃん、ありがとうね」と言われてすぐに笑顔になった。そして、自分の母親にぶら下がるように手を引っ張って、

「ママ、結もおとうとがほしい！」

と、とびつきりの笑顔を向ける。これには母親も「そうね」と微笑み返すしかない。

「でも、結には凜がいるじゃない？」

まだベビーカーを覗きこんで離れない女の子に視線をやって付け加える。

「りんはいもうとだもん！」

そう不満げに言い残すと、結は凜の隣に戻って、一緒にベビーカーの中をのぞく。「さとるくんだよ」と妹に教えるが、凜はふふふつと笑って返すだけ。「さとるくん」と何度も言っただけ教えるその姿は

すっかりお姉ちゃんになっている。口ではどう言おうと、結は2歳下の妹が可愛くて仕方ない。

そして、結の最初の友だちのももかにも妹ができていた。3歳下のさやか。2人ともおとなしく、元気でしっかり者の結にいつも振り回されてばかりいる。それでも、ももかは結が大好きで、小学校のクラスが分かれただけで家で泣くじゃくったこともあった。

そして、もうひとつの姉妹。

姉の皐月は早々にベビーカーから離れると少し離れたところに座って、家から持ち出した絵本をぺらぺらとめくりだす。6歳の結とももか、4歳の凜と祐と、皐月の1歳違いには2人ずつ友達がいたが、皐月にはいない。昔はよく遊んでくれた結とももかは小学生になったとたん、遊んでくれなくなったのが寂しくて1人で本を読むことが多くなった。皐月の隣にびったり寄り添うように座るのが妹の葉月。何をしてもなく、姉がぺらぺらめくる絵本を一緒に見る。

「さっちゃん、あそぼ！」

「いっしょにおさんぽしよう！」

そう結とももかが声をかける。そうすると、皐月の顔がぱつと華やいだ。そう言ってくれるのを待ってたの、とばかりに。大事そうに絵本を置くと、皐月はまだ小さな葉月の手をしっかりと握って、妹に合わせてゆっくり歩く。

2人が合流して、1組の兄弟と3組の姉妹が楽しそうに歩きます。結が皐月に小学校自慢をする。皐月はそれを楽しそうに聞く。葉月はそうしている姉を見て一緒に笑い、ももかは「早く一緒に学校行けるといいね」と妹の手をひく。同い年の祐と凜は手をつないで、顔を見合わせて笑顔になる。一番下で生まれたての悟は太陽の光に眩しそうに目を細めた。

朝のひととき（前書き）

2人の視点を交えて書きます。さて、だれとだれでしょう？

朝のひととき

「……………っ」

あ、くしゃみ。

「……………くっつしゅん！」
した。

カウンターの向こう、東向きの窓からくしゃみが聞こえてきて、思わず口元が緩む。なんか、こっぴつ当たり前のことを感じるのも幸せなんだよな。てか、幸せって感じられるのが幸せだよな。

幸せと思った自分に、さらに幸せを感じ、口元だけではなく、目元まで緩む。

こぼこぼこぼこぼ……

ミルクティーがカップに吸い込まれていく。やさしい香りが鼻をくすぐる。

いつものカップにそっと口をつけると、さらに香りが広がり、香りと一緒に口の中に牛乳のまろやかさに紅茶が包まれながら流れ込む。上出来、上出来。

うなずきながら、いつもは使わないカップを左手に持って、窓に近づく。

「風邪でもひいた？」

ミルクティーを差し出すと、布団の中から手が伸びてくる。それと同時に、かぶるように巻きついている布団から、ちらつと視線がこちらに向く。

「どこかの誰かがしばらく服を貸してくれなかったからね」

貸したじゃん、と口応えしようとしてやめる。かぶるようになっている布団の下には僕のスウェットに包まれた彼女の体があるはずだ。あんまり機嫌が良くないようだから、ここは黙っているのが賢明。

「あ、これ、おいしいね」

また、ちらつと視線がこちらに向く。さっきのとは違う。本当にお

いしそうな顔と、くすぐったくなる笑顔が一緒だ。さっきまで口をとがらせていたのに、今度は笑顔。相変わらずころころと表情が変わる。

「そう？ 良かった」

「バイト中に覚えたんだっけ？」

「そうそう、カフェのね」

「そっか」

彼女がまたミルクティに夢中になる。目線は外。床に座っているから、彼女の眼には空しか見えないはずだけど、嬉しそうに外を見ている。まるで、気持ちを空に教えるように。

空には雲がちよこつと浮いているだけ。口にはミルクティの程よい甘さと香りが広がる。今日は良い気分。こうやって、何をするでもなく、空を見上げて、おいしいものを食べたり、飲んだりして、そして、やっぱり空を見るのってひとつの幸せなんだろうな。

このまま目を閉じて眠ってしまいたい、と思うものの、どうもさっきから私の顔右半分に熱い視線が飛んできていて痛い。

朝起きて一番に見たのが、彼の顔。目を覚ますのを待っていたのか、目を開けると、日に焼けた健康的な肌から笑い皺が印象的な目と、白い歯がやたら輝いていた。目を開けるまえに、どうか現実でないようにと祈ったのは結局無駄ってわけね。

正直、彼が何を考えているのかわからない。というか、今いくつ？ 私が今年25になるから、えつと、18？ 19？ 20？ 21？ 年を覚えてないくらいなのに、どうしてこんなことになっちゃたんだろう……。自己嫌悪。猛省。これが親にばれようものなら、親同士に一気に広まるにきまつてる。そのスピードはきつと光よりも早い。

「何考えてるの？」

低い声が耳に入る。ほら、もう声変りもしてる。小さい時はむしろ高い声できゃっきゃつと遊んでいたのに……。男の子の成長って恐

るしい……。

「ん、別に、特に何も」

目を向けられなくて、視線をミルクティーに落とす。まるやかな色が目の前で揺れる。

空を見ていた表情が少し陰つたのを見落とすはずがない。どうせ、ろくなことを考えていない。基本的にプラス思考なのに、自分自身のことになるとマイナス思考になることなる。そして、たいてい実際の状況とは正反対なことを考えてるんだ。

ミルクティーを見つめる顔には、小さい頃あつた大きな眼鏡はない。その代わり、化粧をしてなくても、上に伸びる長いまつげは変わらず、肌は小さいころに比べて白くなっている気がする。あの頃はよく校庭でサッカーとかしてたもんな。カップを包む手は、指が細く長く、何も塗っていない爪がカツカツとカップの壁面をつつく。女性にしては指が長く、手も大きいのもかもしれないが、男性に比べたら小さく、細い。昔から女の子として見ていたけれど、今は女性そのもの。昨日抱いた体は、平均より小さいのはそうだけれど、自分が力を入れたら壊れてしまっじゃないかって思うくらいだった。

同じだけの月日が経っているから、僕自身も同じ。

彼女は僕の体に、僕の力にかなり戸惑っている。昔と同じものを探そうとするけれど、なかなか見つからない。だけど、残っているものを見つけて安心して、だけど、それだけでないことに動じる。そんな感じ。

だから、彼女は元に戻ろうとするだろう。

だけど、僕はそれを望んでいない。今を望んだんだ。

くるくるとカップを揺らすとカップの中にミルクティー色の渦ができる。

その渦はすぐあらわれるけど、すぐ消えてしまう。

だから、すぐ作って、消えていく様子をただじっと見る。そして、

作る。見る。

「さっちゃん」

低い声で名前を呼ばれる。懐かしい呼び方に「ん？」と顔を上げる。すっと左手が伸びきて、私の右頬を撫で、そのまま通り過ぎる。そして、首の後ろに手が回ったところで、引き寄せられた。

「……っつ」

抵抗を示す間もなく、私の唇に彼の唇が重なる。彼の右腕が私の腰に回る。私の両手はカップをぎゅっと握りしめる。

唇が吸いつくように離れると、いつの間にか閉じた目がゆっくり開いて、目の前の目と合う。思わず目を伏せる。

「ね」

「……なに？」

「おれさ」

「ん？」

「さっちゃんのこと、好きなんだ」

目の前の長いまつげが揺れる。瞬きはしていないのに、瞬きをするように。

両手で頬を包む。両手にすっぽり入ってしまいそうな小さな顔。こっぴどく触れられるなんて思ってもみなかった。でも、心から願ってた。

「さっちゃんは……小さいころから大人ぽかったから、おれなんて、まだまだ子どもだろうけど」

「そんなこと……」

「でもさ、この気持ちだけは勢いで言ってるんじゃないし、おれもたくさん考えたんだ」

「……うん」

「……昨日は我慢できなかったけど」

そう付け足すと彼女の眼がぱっと開き、また至近距離で目が合う。

また伏せる直前に少しだけ視線を上げ「若いって素晴らしいね」と

よくわからないことを言って、また目を伏せてしまう。

「ね、もう1回」

「はい？」

また少しだけ目線が上がる。

「その上目遣い、最高。ぞくってくる」

「……ばか！」

太ももを蹴られた。両手が塞がってると思って安心してたけど、両足があった。

派手にのけぞったところを見て、彼女がくすくす笑う。そして、もう冷めてしまったであろうミルクティーに口づける。

「おれ」って言うときは本気で自分の意見を伝えたいとき。最初に気付いた時は思春期の男の子かって突っ込みたかったけど、彼は気づいていないのかもしれない。

その本気モードで告げられた言葉には嘘はないのだろう。心臓、どっどっどっど……と体の奥底から響く。ドキドキとかじゃない。体中が心臓になったか、もしくは、心臓に取り込まれたかどっちかってくるくらい、体が鼓動を感じる。

こっちの気持ちを知ってか知らずが、彼は「ひなたぼっこって気持ちいいよね」とか言いつつ、蹴られた足に頭を乗せ、満面の笑みを浮かべている。

その顔は初めて出会ってから長く経った今でも変わらない。

これもひとつの幸せかもしれない。

鼓動のおさまった胸の奥で、今まで感じなかった何かを感じて、そう思った。

女の子だけの話

「でね、でね、さらわれちゃうの！」

そう言つて、ももかが走りだす。慌てて結が追いかける。そして、今度は駐輪場の前の階段に座り込む。

「おまえのすべてをいただく……」

色が白く、可憐な様子からは想像ができないくらいの低い声が彼女の口から出る。

結はそれをじつと見つめ、じつと聞くだけ。これから何が始まるのか。

視線を下に落としていたももかが顔を上げたかと思うと、頬を赤らめ、

「ここから全部脱がされちゃうの！……ぶらじゃーも
ぶらじゃーって何？」

小学3年生になった結は最近こつやつてももかの空想の世界に付き合っている。

皐月も最初一緒についてきていたが、ももかの空想についていけずに戦線離脱した。できることなら結も戦線離脱したところだが、ももかがこつやつてよくしゃべるのはこついつときしかない。そんなももかを見るのが大好きだ。

ただ、結にはももかの空想が大人が聞いたらびっくりかえるようなものだとは全然気づいていなかった。

4体のリカちゃん人形からそれぞれ4本の手が伸びている。

「今日はパパとデートなの」

そう髪の短いママは嬉しそうに体をくねらせた。当のパパは仕事なのか、隅の方で倒れている。

「なんで？ ママだけずるい」

「わたしもかれしとデートよ」

「じゃあ、わたしも」

「じゃあ、行ってくるわ」

ママはスキップでもしているのか、ぴよんぴよん跳ねながら、家を出て行った。

倒れていたパパとママを自分の手元に引き寄せたのは皐月。小学校2年生になった。ちょうどこの頃から目が悪くなり始めて、大きな丸い眼鏡をしている。

リカちゃん遊びは卒業したつもりだったが、3歳下の葉月、さやか、1歳下の凜の相手をするにはこれが一番楽だった。とはいえ、これもなかなか難しい。ちよつと冷たいことを言つと「なんでそんなこと言つのに」と誰かが泣きだす。皐月にはまったくそんなつもりがなくても泣かれてしまつては皐月が困る。こんなことだったらお父さんに買ってもらつた本を読んでもる方がずっと良いのに、そんなことを胸にしまいながら、パパとママを見つめた。

「あした、きていくふくはどれがいいかしら？」

「そうね、わたしはこれがいいわ」

「いいわね、それ。わたしもすきよ。じゃあ、わたしはこれ」

「デートにはなにがいいかしら」

「このふく、かれしはきにいるかな」

3人の娘たちは服を自分たちにあて、ああでもない、こうでもない、と相談中のようだ。ペリペリと今着ている服を脱ぎ、ファッションショーでも開かれそうな勢いを感じる。

皐月はふうつとため息をつき、パパとママを立たせた。

「ただいま！」

「……あ、おかえりなさい！」

パパとママの帰宅に声をそろえて、3人の娘たちが迎える。5人全員が玄関にそろつ。

「すっかりおそくなつちやつたね、そろそろみんなでねましようか」
ママがあくびをするように体を反らし、後ろでパパが頷くように2回弾んだ。

「あら、もうこんなじかん！」

「そうね、みんなでねましよう」

「そうしましよう」

3人の娘たちはそう口々に言うと、素直に全員が全員にそれぞれの寝る場所に戻っていく。こうして、5人の家族は夜を迎えたのだ。

と、すかさず声を出したのは皐月。

「ね、外にいかない！？ 外で遊ぼう！」

急な提案に3人は人形をそれぞれ持ったまま、ぼかんとしたが、皐月の勢いに押されて「うん！」と3人が3人とも頷いて、今度は我先にと部屋を出ていく。皐月はもう一度ため息をつく、5人の家族を家の外から出して、服や小物が散らかった部屋をパタンと2つにたたんで、その上に家族を戻した。そして、3人を追って部屋の外に出ていく。

その背中には小学校2年生にして「やれやれ……」と書いてあるように、しっかり者のお姉ちゃんの姿だった。

ちいさな片思いと、ちいさな男の子

祐にとって、小さいころから傍にいて、同じ時間を過ごしているのは凧だった。学校というものが始まってから、同じ時間を共有しているという意味においては、もはや家族よりも多いかもしれない。同学年の2人にとって、それこそ生まれたての赤ちゃんのころから同じスピードで育ってきた。

……はずなのに、どうしてこうも違うんだろう。

教室の後ろから2番目窓側の席から、前からも窓側からも2番目の席に座る凧の背中を見る。

凧の背中はずんと張り、黒板の字をせつせとノートに書き写している。数学の教師が大声で数式の説明をし、少数の生徒たちがこそこそと話している。時々教師の目を盗んでは女子生徒たちが手紙のやりとりをする。教師の言う、くだらないダジャレに少しテンポが遅れて笑う教室。何人かから「おやじギャグ!」「つまんない!」などと野次が飛ぶ。その中で凧は周りの女子生徒たちと目を合わせて笑っている。ベリーショートなのに女の子らしさを失わず、むしろその髪型のせいで女の子らしさが前面にでているんじゃないだろうか。

凧の成績は学年1位を争う。反面、祐の成績は学年最下位軍団に見事にもこまれている。

バドミントン部の凧は次期部長として、部を引っ張りながら、多くの大会で入賞している。反面、バスケットボール部の祐は万年補欠として席を温め、1年生の時に買ったユニフォームも新品同様だ。

文武両道ってこういうこと言うんだろうな……。加えて、性格も良いんじゃない、学年一モテるって言われても納得するわ。

祐はノートをとる振りをしながら、教室に視線を回す。

絶対、加藤も凧ちゃんのこと好きだよな……。

当に加藤は1番前の廊下側の席から、ちらちらと凧を盗み見ている。

一番近くにいる祐の気持ちにすら気づかない凜には、加藤からの視線には気づく由もない。

はあああ……。人知れず漏れるため息。中学2年生になった祐にとって、これはまさしく人生14年目にして14年目の片思いである。

外に目を向ける。窓側の席はこうやって現実逃避ができるから良い。今日はどんより曇り空。午後からは雨だって言ってたな……。傘忘れただけ。

空に影響されてか、祐の気分もどんより曇る。

この片思いが実る日が来るのかな。それとも、凜ちゃんより好きな人ができるのかな。

答えはでない。なのに、何回でも考えてしまう。自分に自信はまるでない。凜の前ではなおさら。凜は自分を軽々超えていつてしまう。少しでも自信が持てたら違うかもしれないのに……。

考えがどんどん深みにはまっていく。と、その時、ガタガタと揺れた。

はっと我に返ると、後ろの席の生徒が両手でガタガタと席を揺らしていた。驚きを隠せないまま振り返る祐に小さく前方を指さす。その方向に目をやると、教卓に片手をつけて体重をかけている、中太りの男性教師が黒ふちの眼鏡の向こうの目が「やっと気づいたのか、藤本」と言う。

また、やってしまった……。心の中で舌打ちをするが、時すでに遅し。

「……すみません」

気づけば、少しがやがやしていた教室内がいつの間にか静まり返っている。そして、視線が祐に集まっている。凜の視線もこちらに向いている。

「大丈夫か、藤本？ 席替えるか？ 俺の前に来い」

「……いや、大丈夫です」

「じゃあ、これ、解け」

数学教師がコンコンと黒板をたたく。なにかの数式のようにだが、 x や y や数字が並びすぎてさっぱりわからない。因数分解と黒板の端に書いてあるから、そうなのだろうけど、祐の知っている因数分解より数字もアルファベットも多い。

「……すみません」

「……わかった。次は絶対に席替えるからな」

「はい」

「じゃあ、これ解けたやついるか？」

教師の問いかけに生徒たちの体の向きが黒板に向く。

凜が体の向きを帰る途中に少し心配そうな視線を祐に投げかけたが、祐はそれに気づかないふりをした。

こんなことはしょっちゅうだ。そのたびに祐は泣きたい気分になれる。

午後に降りだすと天気予報では言っていたが、夕方になっても降らなかつた。

だが、雲行きは時間の経過とともにあやしく、今は黒い雲が空を覆い、まだ太陽が沈むような時間ではないのに街灯が灯っている。

悟はランドセルを脇に置いて、階段に座ったまま壁に向かってテニスボールを投げては取り、投げては取り、と繰り返していた。今日は鍵を家に忘れてしまって、母親か兄の祐が帰るのを待つしかない。聞こえていくる声に小学生の騒ぐ声とは違う声が混じり始めた。中学生たちが帰ってきてるのだ。

祐が傘を持っていないことは知っているし、部活がない日ということも知っている。それなら、早く帰ってくるはず。というか、早く帰ってきて、兄ちゃん。

そう念じるように思いながら、顔にかかった髪を耳に掛けた。

ランドセルが黒くなかったら、女の子と間違えられてもおかしくない。髪が細く、もともと色素が薄いため茶色い。その髪が肩の下まで伸びているため、後ろでひとつにくくっている。ぱっと見た感じ

は活発な女の子だろう。

祐と悟の母親は女の子を欲しがっていた。他の幼なじみたちが祐、悟の兄弟以外、2人姉妹ということもあったのだろう。周りの女の子たちが可愛い髪型にしているのを見ては、そうしてあげられることを羨ましく思い、苦肉の策で悟の髪を伸ばし、悟を鏡の前に座らせて楽しそうに結う。さすがの悟も三編みは断固として拒否をしたが、普段からお姉ちゃんたちから「可愛い」と言われている悟にとって、髪を伸ばして、髪を結うことにさほど抵抗はなかった。

「まだかな……」

中学生が帰ってきている気配を感じてはいるが、祐が帰ってくる気配がない。

こういう時に限って遅いんだもんなあ。そう思って投げたテニスボールは力が入りすぎたのか、壁から跳ねかえってきたのを取り損ねて、座っている階段下まで転がり、さらにはその下の広い階段も転がり落ちていく。

「あ……」

悟は慌てて立ち上がるとボールを追いかけた。階段を1段飛ばしで降り、広い階段の一番下の段で捕まえる。車の下とかに入らなくてよかった。

ぽんと軽く上にボールを放って、右手の中に戻す。それを数回していると、自分の左手から視線を感じて顔を向けると、少し離れたところにゴールデンレトリバーがはっはっはっ息をしながらこちらを見ている。しっぽがゆらゆらと左右に揺れる。

近所の犬ということを知っていた。近くに飼い主の駐車場があつて、たまにこうやってつながれている。動物好きの皐月や葉月、2人の父親がよく相手をしているところに入っついで、撫でたことが何回かあった。

「遊びたいの？」

悟がその場から犬に話しかける。少ししっぽが揺れるのが早くなる。悟がボールを地面に投げて、空中にあがったボールを片手で取って

見せると、自分の体を近づけようとする。が、鎖が邪魔して、結局元の位置に戻る。が、しっぽの揺れがどんどん早くなる。

犬って、嬉しい時とか遊んでほしい時にしっぽをふるんだよ。

そう、さっちゃんと言ってたな。悟の脳裏に臯月が教えてくれたことが過ぎる。

悟はボールをはずませながら、ゆっくり近づいた。犬が口を開け、舌を出す。まるで笑っているようにも見える。

撫でられるところまでの距離まで近づいた。人懐っこい目が悟を捉える。悟もそれが嬉しくて、ふっと笑い返す。

だが、次の瞬間、何が起きているのか分からなくなった。

自分の肩に重くのしかかるもの、自分の耳元でする荒い息、顔にかかる明るい毛。

自分の手からボールが落ちたのにも気づけない。

小学4年生の悟にとつて、ゴールデンレトリバーはあまりに大きい足を踏ん張っていないと立っていられない。

どうやって逃げていいのかも分からない。

誰か、誰か、誰か、誰か……。

いつまでこうしてればいいの!?

目もつぶれない状況が永遠に続くかと思ったとき、ふっと肩が軽くなった。

その途端、力が抜け、2歩、3歩後ずさったかと思ったら、そのまま地面に尻もちをついてしまった。

「ちよつと！ さとくん、大丈夫？」

その声は葉月だった。目の前に心配そうな葉月の顔がある。その顔が葉月と判断するにも時間がかかってしまった。

犬を後ろから抱えるようにしていた臯月がそつと犬を下すと、ぽんぽんと犬の体を叩くように撫でる。

「お姉ちゃん。さとくん、大丈夫かな？」

返事のない悟がさらに心配になって、葉月が姉を振り返る。葉月の頭の後ろで臯月が悟に視線を落とす。そして、悟の視界に犬が入ら

ないように悟に近寄っていく。そして、悟の前にしゃがんだ。

「さとくん」

皐月が微笑むように笑いかける。そして、皐月の右手がやさしく悟の頭をなでる。犬に抱きつかれた瞬間に髪がほどけてしまい、ぐしやぐしやになつてしまっているその髪を梳くようにやさしく。

「もう大丈夫だよ」

そのことばに悟の目からは涙があふれ出す。一瞬、皐月も葉月もびつくりしたが、皐月はその体をそっと抱き締め、葉月は姉の手の代わりに悟の頭を撫でた。

皐月と葉月の腕の中で、悟は声を出して泣いた。ことばにできないくらい、怖かった。誰も助けに来てくれないと思った。しゃくりあげて苦しかったが、それでも涙が止まらない。皐月も葉月も泣きやませようとはせず、ただ、ただ、泣いている悟を抱きしめるしかない。

どれくらいの時間が経っただろう。

泣きつかれた子供のように完全に体から力の抜けた悟はまだしゃくりあげてはいたが、涙も止まり、落ち着いてきた。小学校4年生とはいえ、男の子の悟は今の状況が急に恥ずかしくなり、体を離れた。

「もう大丈夫？」

顔を覗き込んできた皐月に、顔を見られたくなくて、ぶんぶんと首を縦に振り、さらに俯く。葉月は「そっか」と言つて立ち上がり、姉が投げ捨てた荷物を取りに行く。

皐月もゆつくり立ち上がり、悟がそれに続くのを見守る。犬に抱きつかれたパニックで力が抜けきつてしまっていたが、悟はふらふらと立ちあがった。顔は相変わらず俯いたまま。だが、皐月も覗き込もうとはしない。

「あれ？ 悟？」

そんな雰囲気壊したのが悟の背後の声。振り向くと、兄の祐が不思議そうにこちらを見ている。

葉月が姉の荷物をぶんぶん振り回しながら、祐に近寄る。

「たっちゃん、久しぶり〜」

「うん、はあちゃん、元気そうだね」

「うん！ 葉月はいつでも元気だよ！ 来年は葉月も中学生だからよろしくね〜」

「まだ、半年以上も先だよ、はあちゃん……」

「あ、そっか〜。そうだね！」

あははは、と大きな口で笑って、白い歯を見せる。人懐っこさは4兄弟の中では末っ子の悟と競うくらいだ。

ただならぬ雰囲気を感じていたが、葉月の笑顔に聞くタイミングを逃してしまった。

「なんかね、さとくん、たっちゃんを待ってたみたいだよ！」

葉月が笑顔のまま付け加える。祐が悟に目を向けてみると、悟は相変わらず俯いているが、皐月が「そうだよ」とばかりに頷く。

また鍵を忘れたのか。こういうことは初めてじゃない。小学生のときはよく教室まで取りに来ていたが、小学校と中学校で学校が分かれると、外で待っていることが多かった。

皐月に支えられるように歩いてきた悟に視線を向けると、少し泣いたようなあとが目に入る。ただ、こっちを見るような気配もないし、どちらかというところ「何も聞くな、何も言うな」という感じもする。

悟がそんなだから、祐も特に何かを聞くことは思わなくなった。それは男同士の暗黙の了解みたいなものなのかもしれない。さっちゃんもはあちゃんも、特に何も言わないし……。

「はい、さとくん」

葉月が拾い上げたテニスボールを悟に手渡す。「ありがと……」そう弱々しながらも返ってきた言葉に葉月がまたにっこり笑う。皐月も安心した。

「じゃあ」

祐はそう言っただけで、悟と一緒に歩き出す。皐月と葉月も少し離れて後ろを歩く。

「じゃあ」って言われたけど、同じマンションだから、一緒なのに

ね！ その葉月が小さく、そして、ちよっといたずらっぽく姉の耳に言う。皐月は苦笑いを返す。

4人のあとには、ぽつぽつと雨が落ち始めていた。

ちいさな片思いと、ちいさな男の子（後書き）

前話が女の子だけのお話だったので、男の子メインで書いてみました。

祐がへたれでごめんなさい…。悟はまだまだ幼い小学生ですし。。。

夏の思い出(前書き)

時間経過がばらばらでごめんなさい。

夏の思い出

山川結、長谷田ももかの2人が小学6年生の夏、幼なじみの4兄弟の家族で盛大に花火大会をすることになった。

夏の花火大会はいつからか恒例行事。だが、来年は2人が中学生になる。きつと今までのようには集まれないと、子どもたちより親たちが張り切っている。

花火大会とは大げさだが、近くの公園が会場だ。それぞれの家から料理を持ち寄って、親たちは缶ビールや缶チューハイを片手に語る。

子どもたちのこれからや、ご近所さんの噂、最近の出来事、他愛もないことばかり。けれど、子どもたちを理由にこうして話す機会も少なくなる。

当の子どもたちは思い思いの時間を過ごしている。

結とももかは花火もほどほどに好きな男の子の話に夢中だ。親たちに聞かれないように、レジヤースートの隅っこでこそと話をしている。

「で、ももちちゃんどうするの?」

結が眼鏡の奥で大きな目をキラキラさせる。高学年になったころから結のトレードマークは丸くて大きな眼鏡で、遠視の結は眼鏡の奥の瞳は、結の実際のものより大きく見える。

ももかは好奇心たつぷりの結の視線に、小さく細い白い手で自分の頬を包む。

「好きって言うの?」

「うん。あ、でも、でも、でもお……」

顔と体がくねくねと左右に動く。暗い中でも白い肌が赤くなるのがわかるくらい照れている。

ももかは今恋愛中。相手は同じクラスの学級委員長。ただ、受験組だから一緒にいられるのはあと7カ月くらいだ。

小学校6年生でも「付き合う」ということは知っている。ただ、一緒に登下校したり、一緒に出かけたりするだけ。でも、そうできたらどれだけ幸せなんだろう。

「ねえ！」

くねくねしていたももかは何かを思い出したように、両手を自分の頬から結の両肩に置いて、結の目を見つめる。

「結ちゃんは好きな人いないの!？」

「へ?」

このタイミングで自分に話が降ってくるとは思ってなかった結は目を瞬かせる。そして、花火してればよかったと後悔する。

結とももかから離れたところでは、祐と悟を引き連れた皐月がねずみ花火に火をつけては地面に投げ、3人で声を上げている。

もちろん、2人に向かって投げているわけではないが、地面を滑るように回りながら進むねずみ花火に2人はことばにならない声を上げて、わあわあと騒いでいる。

さらに少し離れたところでは凜、さやか、葉月が花火を片手に何かを描くように水辺に向かって花火を振っている。

「ほら、ハート！」

花火の光の残像が目に残り、うつすらハートができる。凜がそうするのを見て、さやかも葉月も一緒にハートを描く。ハートに飽きたら星、星に飽きたら思い思いに光の残像で遊ぶ。

子どもたちもこの夏の花火大会でそろうのは最後だということはおわかってはいたが、今その実感はない。ただ、ただ、この瞬間を思い切り遊ぶ。それだけ。

花火もひとしきり終わり、子どもたちが遊び疲れてきたところで、恒例の線香花火対決が始まる。

ルールは簡単。線香花火の炎が最後まで消えなかった人が勝ち。

こればかりは飲んでいた親たちも混じり、総勢16人の大きな輪が広がる。

それぞれ近くに置かれたろうそくで線香花火に火をつける。

「よいい、スタート」

誰かの掛け声もなぜか小声になる。落とさないよう、落とさないよう……。

線香花火の先がぐるっと回り、赤い粒ができる。少し経つと、その赤い粒からは糸が散るようにさあっと小さな音をたてて、光が舞う。そこからだ。赤い粒が地面に落ちてしまうのか、そのまま小さく黒くなってしまふのか。

子どもも大人もただただ自分の手から伸びる線香花火を見つめる。

光の舞に子どもたちから「わあああ」と感嘆の声が上がった以外は特に誰もことばを発しない。

粒が落ちた親や子は「あゝ、残念！」などと声を出したが、残った線香花火を見つめる。

最後の最後、誰かの線香花火が残り、そして、小さく消えていった。まだ光として揺れている気もしたが、人の目にはもう何も映らない。

こうして、恒例だった夏の花火大会が幕を閉じた。

これからはそれぞれが、それぞれの道を進む。

利害の一致

やった……！ 悟、バカでありがとう！

兄として喜ばしいことではないが、男して喜ばしいことに心の中でガッツポーズをした。

なんでもない顔をするのが難しいくらい嬉しい。

母親がこつちを見ていないが、小さいころからつまみ食いをするたびに背中越しに怒られていた。「背中に目がついてるからね」と不敵に笑った母親だ。あながち嘘じゃないかもしれない。ここでにやけたりしようものなら、いつもみたいにいる詮索されるにきまつてる。

「えー、おれ、嫌だよ」

「あんたの意見は聞いてないの。このままだったら留年よ？ 高校留年！ そんなお金はうちにはないの！」

包丁を持った母親が振りかえり、びしつと言いつつ。母親の勢いに包丁も加わったことに、悟がたじろぐ。

問答無用、どんだけ足掻こうと無駄な努力だよ、弟よ。おれ、大賛成。

悟は陸上競技が認められ、私立中学校に入学した。おれが運動音痴なのはきつと母親の腹の中に運動神経にまつわるすべてを置いてきたからにちがいない。そのあとに腹に入った悟がおれの分まで吸い込んだって思ったら、同じ兄弟にして、これだけ違う理由ができる。それ以外に違うところはあるが、少なくとも頭が悪いのは兄弟の共通点。

その悟も、高校に上がる少し前に靭帯を傷つけてしまった。切れるところまではいかなかったが、短距離走がメインだった悟にとって、靭帯への損傷は選手生命の終幕を示していた。

当の悟は悔しがる様子も一切見せずに「仕方ないよね」と言って、高校からダンスを始めていた。小学生のころから足が速いと称えら

れていた悟だが、実際にやりたかったことではなかったのかもかもしれない。

陸上部に入っていたときは期待の選手ということ、勉強ができなくても授業中に寝ていても教師は多めに見てくれていたのだが、高校に進学し、部活も辞めたとなれば、そうはいかない。

今までサボっていた分、急に勉強しろって言われてもすぐできるわけがない。悟はもはや留年の危機を迎えていた。

そして、その危機を救うために悟の家庭教師に凜が選ばれた。凜は地域で一番偏差値の高い高校に行き、一浪したが、名の通る大学に進学した。

中学校を卒業して以降、凜ちゃんに会う機会もめっきり減った……。そのため息も心の中でつく。

だからこそ、母さんの選択は最良で、最高！ ケータイの交換もできるし！

「兄ちゃん、顔が緩んでる」
低い小さな声にはっとする。目の前の悟がテーブルに突っ伏しながら、片目だけこちらを見ている。

ぎくつとしたが、悟はそのまま顔を自分の腕の中にうずめた。どうやら、よほど嫌らしい。必死の抵抗があっけなくて砕け散ったんだ、無理もない。助けの綱と思っただ兄もこんな調子だ。

諦めよ、弟よ。ふつと笑ったら「何、笑ってるの、たちちゃん」と嫌な笑顔を浮かべた母親が包丁を持ちながらこっちを見ていた。

はあああ……。

腕の中にため息を落とす。

どうしてこうなっちゃったんだろうなあ……。いや、理由はわかってるんだけど。

原因が同じでも、こう切り替わるとは思ってもなかった。

凜ちゃんが家庭教師ね……。。

腕と腕の隙間から兄ちゃんの様子をうかがう。相変わらず締りが悪

い顔をしている。

凜ちゃんを家庭教師に選んだ理由はもちろん頭がいいから。だけど、母さんの隠れた意図を感じる。長年片思いを続けている兄ちゃんを可哀想に思った母さんが少しだけ手助けをした形だ。

頭が良いだけだったら、結ちゃんだって、皐月ちゃんだってあり得る。凜ちゃんを選んだ理由がそこにある。

はあああ……。

ため息しか出ない。

凜ちゃんが家庭教師ね……。

凜ちゃんの顔をつぶすわけにはいかない。そうしたら、母さんだけじゃなくて、兄ちゃんにも殺されかねない。

はあああ……。

再会の予感

有名テーマパークのパレードソングが携帯電話から流れる。

その音楽を口ずさみながら、リズムを踏むように葉月が階段を下りてくる。そして、くるっと回転してからテーブルの上の携帯電話に手を伸ばす。

「だっれかなっ!」

携帯電話からはじゃらじゃらといろんなストラップがぶら下がっている。

絶対、携帯電話よりストラップの方が重いはず……。

テーブルで食事をしていた皐月がやたら、ご機嫌の妹の葉月にちらっと視線を向ける。

「へええ……」

メールを見ながら「ふん、ふん」と頷く葉月。

皐月はそんな葉月を放って、自分で作ったカルボナーラをフォークにくるくると巻きつけ、口に運ぶ。

初めて作った割には良い感じ! 料理の才能があるかもしれない……。

自分の手料理に冗談とも本気ともつかない評価をつける。これがいつもできたら才能かもしれないけれど、次に作った時にはたいがい失敗しちゃうんだよなあ……。

今度は自分の才能のなさにため息をつく。

「さっちゃん!」

うわ、びっくり!

皐月は急に目の前に現れた葉月の顔と声にのけぞった。壁に後頭部をぶつけた。

「いったあああ……」

「うわ……痛すぎるね、さっちゃん」

葉月が皐月以上に顔をしかめる。その顔に、皐月は痛みとは別の意

味で顔をしかめる。

「急になに」

そう尋ねられた葉月が、一瞬きよんとしたが「あ、そうそう」と今度は皐月の前に携帯電話の画面を差し出す。

見えない……。画面が近すぎて、文字が読めない。

皐月は携帯電話を持っている葉月の手首をつかんで少し離す。

「ふーん……」

そのメールはさやかからのメールで、祐の提案で幼なじみみんなでの食事をする事になったとの内容。日時、場所指定で、提案というか決定事項のお知らせのように見える。

もちろん、皐月にも葉月にも反対する理由がないし、予定もない。

「楽しそうじゃん」

ふっと笑った皐月に、葉月は満面の笑みを浮かべた。

「よっしゃ、決まり！」

葉月はるるんとメールに返信をし始めた。

流行りの音楽が携帯電話から流れる。

ソファに座っているさやかが横に置いてあった携帯電話を手に取る。携帯電話にはさやかの名前。相変わらず、メールを返すのがはやい。

「おねえちゃん。さっちゃんも、はあちゃんも行くって」

「じゃあ、私たちも行くのか」

隣に座っていたももかがふうつと息を吐く。

人見知りの激しいももかとさやかにとつて、久しぶりに幼なじみに会うのも緊張してしまう。

みんなと会わなくなって、どれくらいだろう？ ふと思う。

ももかは結とたまに会っているけれど、そのほかのみんなとは全然会っていない。

同じマンションに住んでいた幼なじみたちは、祐・悟兄弟、皐月・葉月姉妹は引越してしまった。とは言っても、最寄駅はみんな変わらない。それぞれの家族が住みよくなってしまったのだ。

でも、結局最後にみんなであつたのは小学6年生の花火大会。

そう考えると、えーっと、10年ぶり。わあ、10年！

「10年だね」

ももかがあったことがさやかが口に出す。

「会いたいね」

「ね」

ももかのことはにさやかも領ずく。

10年ぶりの再会まであと2週間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6017k/>

僕と、彼たちと、彼女たち

2010年10月9日23時10分発行